

モデル事業名	「未来に向けた関・矢立地区の持続可能な国土開発事業」
活動団体名	特定非営利活動法人 水守の郷・七ヶ宿
ホームページ	http://www.mizumori7.org
所属／担当者名	理事長／海藤 節生
連絡先	0224-37-2171 setok3333@hotmail.com
活動地域	宮城県刈田郡七ヶ宿町関矢立地域

### ● 活動地域の概要

この町は古くより宿場町として旅人たちを支え栄えてきた。その後、農林業を中心に人口が増加、昭和35年には人口5177人にも達した。しかし、産業構造の変化により人口は減少に向かう。近年では七ヶ宿ダムの建設工事に伴って158世帯がダム湖に沈み、その結果多くの人々が町外へ移り住むこととなった。

1. 人口1749人(△266人) ★間近2年で△71人
2. 世帯数721世帯(△37世帯)
3. 高齢化率43.28%(+7.5ポイント)
4. 年齢別人口構成の推移は10～19歳の減少が特に際立ち、75歳以上の高齢者の人口に占める割合が増加している

公共交通は今年9月に民間のバス会社が撤退し

町民バスが白石市と七ヶ宿町を一日6往復の割合で連絡する。(※数字は平成22年10月31日現在、平成11年3月末比)



### ● 活動地域の課題

宮城県民183万人の水瓶として水質日本一を目指す我が町は国土保全に努め、水源を適正に管理していかなければならない。地域住民に対し行ったヒアリングの中に「住む人たちの仕事が変わったために地域のつながりが無くなっていった」というひとつの回答があった。地域に住む人たちが同じ仕事を営んでいた時期には、地域の人たちは暮らしの中で助け合い、支えあってきた。自然の恩恵を受け、日常にコミュニティが存在し、地域の環境が保全されてきたのである。地域の担い手が消え、山村は都会同様、個人中心の社会へと変化しつつある。「働き」の形と同様に消費の形も変化を遂げた。暮らしの中で生活する人たちのコミュニティを支えてきた商店も次第に姿を消し同時に人々が集う場が失われている。「働き」の変化はコミュニティばかりか農地や森林をも荒廃に導いている。大自然という工場を活用し、古くからの「働き」と融合させ、この地域に人々が住み続けることが国土の維持管理において大変重要なことである。

### ● 活動の内容

(全体として)

・自然と人がつながる場づくりを行うことによって新たな人の流れをつくる。その流れを止めることなく活動を続けていくことで地域に新しい社会が生まれ、人が集い住み続けることで地域の環境が保全される。この人と自然の関わり方を創造していく為のきっかけとしてこの事業が始まった。「大自然」を暮らしに活かし、経営していくことで中山間地の再生を図ることが最終目的である。平成21年度、砂防ダム上流のピオトープに隣接した河川敷の法面を人が歩き集う場として整備することから始まった。夏には白い睡蓮でいっぱいになる沼地の裏側の斜面を間伐し下草を刈った。発生する樹木を利用した炭をせせらぎに置き、沼に流入する水質浄化も兼ねた「炭のせせらぎ」がこの散策路のシンボルとして現在も炭置き場として利用されている。炭焼きをする小屋に隣接した未利用施設の内外を徹底的に清掃し、いつでも誰でもが使用できる状態に再生、地元小学校の学年行事など雨天の野外学習の場としても活躍している。平成21年度はこの炭焼き小屋周辺に「暮らし体験」用のかまどやいろりなどを設け様々な体験学習を試行した。隣接する耕作放棄地を借り受け、町内外の様々な人々が協働して復興し蕎麦の生産を行い最後は食として楽しんだ。一年目の寺子屋は「山の学校」という形で位置づけられ、水という関わりを越えた地域間交流の場として範囲を拡げて行われた。「古くからある「働き」を整理し先人達の知恵を学ぶための体験活動を実施することによって副次的に国土が維持管理されていく」という意識した自然活用と関わりづくりによるコミュニティ創生が始まった。

(間近一年間の進捗)

・モデル事業は七ヶ宿ダム自然休養公園内に立地する七ヶ宿町所有の木材加工センター周辺を中心に行った。2年間の事業の経験をいかし、よりフットワーク良く活動するためにNPOの事務局裏手に炭窯、かまど及び五右衛門風呂の新設を行った。施設を動かすために必要な森林資源調達を目的として隣接する民間の山林を借り受け、下草刈りや間伐といった「働き」を提供する試みをスタートさせた。JRの旅市、仙台・宮城伊達な旅キャンペーンなどの観光事業と連携し「源流ツーリズム」と題したエコツーリズムを実施、カヌーや炭工芸など水源ならではのメニューを実施した。

## ● 活動の成果

(全体) 環境整備や保全活動によって山村での「働き」を整理していくと、先人たちが生態系サービスを巧に受け継いでいたことが改めて強く感じられた。2年間のモデル事業を実施した結果自然と人が共生していくためには人間の数に対する自然の規模がとても重要であり、人々の暮らし方によって(生態系サービスの利用度合い)必要な規模が大きく変化することがわかった。耕作放棄地で蕎麦を栽培したことによってその収穫→刈り取り→石臼での製粉→食に至る作業の中で、新たに多様な関わりが生じた。耕地の復興には七ヶ宿ダムの利水地域住民が、萱や葦の除去には大学生や高校生が、そして収穫の時期には学生から大人まで多くの人達が関わってくれた。食に至っては、本格的な蕎麦サークルの協力を得て、特別養護老人ホームの利用者に対し振る舞い蕎麦を提供した。耕作放棄地の復興の様子は地方紙に3度にわたり掲載され、新たな公共によるコミュニティ創生を広く県民に知らしめることとなった。ダム湖周辺をベースに山学校体験センターとして制作したパンフレットがJR東日本や宮城県の観光キャンペーン関係者の目にとまり民間のツアーメニューとして取り上げられた。



地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等については、夏は睡蓮の花が冬は飛来する白鳥やマガモを楽しむ新たな地域住民の憩いの場として、また施設利用者の毎日の散歩の場として利用されている。新たなランドマークとなった「炭焼きの煙」は、立ち寄り訪問客と炭焼きメンバーの交流の「のろし」としてこの地域の風物詩となりつつある。行政に求められてきたスピード感を備えた私たち「新たな公」の行動力に、地域住民からは常に篤いエールが届いた。特に嬉しかったのは当該事業実施区域外からも協力者が出現してきたことである。事業の実施に従って人が集まり動き始めた流れが、地域内外にも元気を与え始めたようだ。歴史の中で長い冬の時期に外部と遮断され自分達の手だけで生き抜き今を作ってきた雪国独特の文化は時代と共に姿を変え始めている。地理的にも開かれてきた地域が外へ目を向け始めている。2年間の事業を通して「協働」の意味を少しだけこの地域に伝えられたように感じる。「働き」を通じた関わりの中から多面的に効果が拡がり始めた。高齢化、過疎化に向かう町がポジティブな発想で生まれ変わるためには常にグローバルな視点を持ちながら敏感に変化していく事が大切である。

(間近一年間の成果) モデル事業終了後、活動を整理し身の丈にあった規模で山学校的な体験者の受け入れを継続している。



高校生、大学生、旅行者、団体、個人と希望する主体は多様であり体験メニューのニーズも様々。回を重ねる度にニーズに合わせ臨機応変に対応できる体制が整いつつある。入門編では、自然と触れる機会を演出してあげる。高校生などを対象にした学習編では実際に山に入りそれを利用して自然を身近に感じてもらうメニューを実施する。行動的な若手企業家向けに間伐作業を中心に組み立てたメニューは継続して実施されている。あらゆる主体がひとつの場所で「働き」実際に荒れた山が少しずつ整備されている。まったくつながりのない人達がひとつの場所でつながれ協働していることに今、手応えを感じている。行政区を越え隣接する地区と新たな町「レイクサイドタウン」作りが始まった。小さな規模で連携しあい総合的に活性を図る取り組みが始まっている。町は守っていくものではなく作られていくものである。

町は守っていくものではなく作られていくものである。

## ● 今後の課題及び展望

(課題) 活動を通して発見された課題

町という機能を維持していくために必要な最低限の人口を割り込んでいる集落が点在する集合体七ヶ宿。点在する集落に更なる高齢化の波が押し寄せる。中学生以下の子どもたちを全部あわせてもわずか100人程度の町の将来は明るいとはいえない。地域の「働き」を事業の中で整理していくうちに、地域固有の暮らし方すべてを「文化」と呼ぶことがわかってきた。文化は固有のもので多かれ少なかれそれぞれの地域で受け継がれてきたわけである。文献が残されているわけではない。私たちはそれぞれの地域からそれぞれの文化を学び、子どもたちと一緒に地域を次世代につないでいかなければならない。過疎化の進行と共に耕作放棄地が増加し、比例して国土は荒廃していく。常に社会が担うものは未来でありその基本的なところに教育が存在する。地域の文化消滅の危機感をつのらせ各地で踊りや太鼓などを復活させ、文化の形だけを継承していく傾向が見られるが心を揺るがすほどの感動を感じることは少ない。まずは地域に必要なはずの様々な主体が集い易い環境を作ることが必要である。質の高い交流から生まれる知恵、そして共有可能な活動を継続して行っていく仕組みを作らなければならない。今更ながらにキーワードは地産地消、フィールドは十分に存在する。自然と親しみ、その中で営みを続けていくことが今回事業で提案した持続可能な国土開発事業につながっていく。

(展望) 今年10月に名古屋で開催された生物多様性に関する国際会議COP10に参加し日本という国で古くから培われてきた文化は世界的に見てもかなり質が高いということがわかった。その文化を担ってきたのが全国の民であったことを誇らしく思う。田畑、山林をつくるのは私たち民。平成23年2月には国土保全、環境、教育、ものづくりといった様々な切り口でトークライブ「THE 田んぼ」を開催する。命を支える「田んぼ」の未来づくりへの可能性について近隣地域が集結して学びあうセミナーだ。文化は守っていくものではなく作られていくものである。